



東北大学



報道機関各位

2013年4月17日
東北大学大学院医学系研究科

フィリピンの狂犬病ウイルスの遺伝子解析から伝播状況を解明 より効果的な狂犬病対策につながる知見

東北大学大学院医学系研究科・微生物学分野の齊藤麻理子助教、押谷仁教授らのグループはフィリピンの狂犬病ウイルスの遺伝的多様性とそれらの地理的分布を明らかにしました。本研究はフィリピンにおける狂犬病対策に貢献することが期待されます。

なお、本研究結果は4月4日のPLoS Neglected Tropical Diseasesに掲載されました。

【研究内容】

狂犬病は、発症すればほぼ100%が死に至る恐ろしい病気です。また、世界中で狂犬病制圧に成功しているのは日本を含む数か国しかありません。フィリピンでも毎年200-300例の狂犬病症例が報告されており、2006年にはフィリピンから日本へ2例の狂犬病輸入症例がありました。フィリピンでは2020年までの狂犬病撲滅を掲げているため効果的な対策が必要であり、狂犬病ウイルスの遺伝子解析は、より効率的なワクチン戦略を考えるうえでも有効です。

本研究ではフィリピン国内各州の動物衛生研究所と協力して、フィリピン各地の狂犬病動物検体を収集し、235検体の狂犬病ウイルスG遺伝子の解析を行いました。その結果、フィリピン株はいずれもAsian2bというグループに属し、それは中国の株(Asian2a)から派生したものであること、フィリピン株の中では3つのメジャーグループと2つのマイナーグループに分けられることが分かりました。いくつかの例外はあるものの、それらのグループは海で隔てられた地域とほぼ一致しており、さらに詳細なサブグループに分類した場合でも、同じサブグループのウイルスは狭い地域内に認められました。

これらの結果よりフィリピンにおいては、一度狂犬病ウイルスが流入した後は限られた地域内でウイルスが伝播していると考えられました。またフィリピンのような島国においては、地域ごとに徹底したイヌへのワクチン接種がより有効であることが示唆されました。本研究はフィリピンの狂犬病対策に貢献することが期待されます。

なお、本研究は文部科学省感染症研究国際ネットワーク推進プログラム（J-GRID）および、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)（課題番号 20603002）の支援を受けて行われたものです。

【論文題目】

English Title

“Genetic Diversity and Geographic Distribution of Genetically Distinct Rabies Viruses in the Philippines”

「フィリピンにおける狂犬病ウイルスの遺伝的多様性と地理的分布」

(PLoS Neglected Tropical Diseases, published on April 4, 2013)

【お問い合わせ先】

東北大学大学院医学系研究科微生物学分野

助教 齊藤 麻理子

電話番号：022-717-8211

Eメール：saitom@med.tohoku.ac.jp

【報道担当】

東北大学大学院医学系研究科・医学部広報室

稲田 仁（いなだ ひとし）

電話番号：022-717-7891

ファックス：022-717-8187

Eメール：hinada@m.tohoku.ac.jp

【図】 フィリピン、ルソン地域における狂犬病ウイルスのグループ分類とその採取地域の分布。1つの○または△は1検体を表し、同じ色、形のものは同じグループであることを示す。ルソン地域内で採取された検体は全部で14のグループに分類された。

